

スナップ

スナップ 1

今回は子どものイメージの世界の
スナップを集めてみた。 中川節子他

● ぼくにきこえる変なことば

☆ 2年生の補教にいったときのことである。あたりを歩きまわっている子がいる。授業の最後に読書をと、本を読んでいると、本と私の間にその子がわりこんできて、私が本を読んでいるあいまに私のおっぱいをさわる。私は本を読みながら、「おっぱいさわるんじゃない。」と数回言った。

「……とクマさんはいった」

「おっぱいさわるんじゃない」（声を変えて）

「そして、さっちゃんは……」

という具合に。

しかし子どもたちは私のこのさはさんだことばに全く反応せず、何事もなかったように本のお話をきいている。ははん、これは、いちいちこの子に反応しないようにきちんとしつけられているんだな、と感心してその時間の補教は終わった。いつものように家に帰り、夕食のときこの話を実演してみせ息子に言うのと、

「おかあさん、なんでいちいちオバサンジャナイ！
つてことわるの？」といい、

「あ……先生だからか。」

と妙に納得している。

なんと息子には「おっぱいさわるんじゃない」
が「オバサンじゃない」ときこえていたのである。
きつと、あの2年生にも、まさか先生はそうは
言わないと思い、「オバサンじゃない」ときこえ
たいたのかもれしない。

（息子・4年男）

☆ パンツ一ちよでブンガクザンマイというキャッ
チフリーズの出版社の本を宣伝カバーを見て即、
「パンツ一ちよでジブンガクサイ」

（4年男）

● イメージと記憶

☆ ジャジャジャジャーと運命の曲の指揮のまね
をしたとたん、私のことばと体が止まった。巨大
なクモを発見したのである。

● あの世からの道すじ

それ以来、子どもたちはこのジャジャジャジャー
を聞くたびに、すぐ巨大なクモの話をする。

（2年男）

☆ 母が死に、家を売り新しい家にひっこしをして
初めてのお盆。迎え火の準備をしながら、子ども
が真剣な顔をして言う。

「お母さん、こまったね。だっておばあちゃんとお
じいちゃん、くる道わからなくなっちゃうねえ。」

（3年男）

☆ 上原先生がこの四月に他界されたので、今年のお
盆は先生も一緒にお迎えしようと迎え火をした。
「お母さん、先生も本当に来るの？ でも乗る馬
がないよ。おじいちゃん、おばあちゃん、ナス
とキュウリはおわっちゃうから」

「でもたましいだから大丈夫よ。ほら、あっちから
「そうかなあ……でも、ほんとうにあっちから来
るみたい」

その時、西の方に夕日の光がさした。（5年男）

● うちんち

☆ 家を売ってしまってから、まだ息子には、そ

のことがわからない。

「おかあさん、大丈夫だよ。うちんち、まだ、ちゃんとあったよ。」

と、毎日見に行つて安心してゐる。

(2年男)

☆ 家がとりこわされ、なくなり、さら地になり、そこに草が生えてきた。

「お母さん、うちなくなつたけど、はらっぱになつてたよ。だからぼく、うちんちのはらっぱで、○君と一緒に遊んだよ。」

(2年男)

● イメージタンク

☆ 夏休みのことをひとりずつ話をさせた。中休みを一回とると、次に発表する子が私のところに来て、

ある保育者の手紙

スナップ2

上原輝男・瀬底ノリ子

でしょ。

先生、私たちのような仕事にたずさわる者は、みんなそうなのでしょう。

子どもたちの姿が見えなくなると、引いて行つた波が押し返して来るように、子どもたちの声が、まるで潮騒を聞くように、私の耳に届いて来ます。

昨日は肌寒い日でしたのに、今日は暑い日でした。英子ちゃんは、もう早速靴下を脱ぎ始めます。

「せんせい、わたしのあしに、さわって。あつい

「先生、ぼくね、みんなのはなしきいていたらね。いっぱいいいっぱいいろんなことできちゃってね。こまっちゃった。おっぱらってもどんどんでてるんだよ。」

(以上、町田第四小教諭 中川節子報告)

● 夢はもうひとつの世界

☆ 「お母さん、きのうさみしかった。だって、ゆめみなかつたんだもん。」

(5才女)

● なに、おもつてんの？

● うつとりしている夢見心地のNちゃん。
「うーん、もう」と柱にキスをしている。

(3年女)

(日野南平小教諭 小林照子氏報告)

のでしょう。ですから私もいつまでたっても子どもなのです。

感触を楽しむという言い方をしましたけれど、決して人間が感触を持っているのだと考えたことはありません。人間の感触は、自然が与えてくれるのだと思つています。与える、与えられるというより、交わる方がよいかもしれません。子どもの立場では、子ども自身が自然と分離していませんから、交わるということばでさえ躊躇されます。だからこそ、子どもは草木に話しかけることもでき、小鳥や仔猫・仔犬みんなお友達ということになるのだと思うのです。

まい子ちゃんのお母様が、連絡帳に書きつけて下さったことを思い出しました。まい子ちゃんは四歳。ひとり遊びしていて、ふと、

「わたし、なんだかさみしい。おそとにいつてはしつて来る。」

と言って、杜宅の庭をいまわりして来るのだそうです。

そういえば、身体測定の時、はだかになったら、
「さみしい、さみしい」といって、小さな腕を交差させて、自分の小さな胸をいたわるようにしつかり抱いていたのも、まい子ちゃんでした。

秋のさびしさは、きつとこのまい子ちゃんに宿つた動物的原体感にちがいないと思われるのです。他の季節にはない味わいを、子どもたちは名詞や形容詞的に覚えて行くのではありません。春は浅く、秋は深いといい、この逆を、まちがつても口にしないのも、それぞれ、私たちの体にしみこんだ感覚があるからではないでしょうか。春、夏、秋、冬、それぞれの日の光、湿度、気温、そしてその移り変わり

